なぜハラスメントは生じるのかー権力差と持続性による考察

片野修

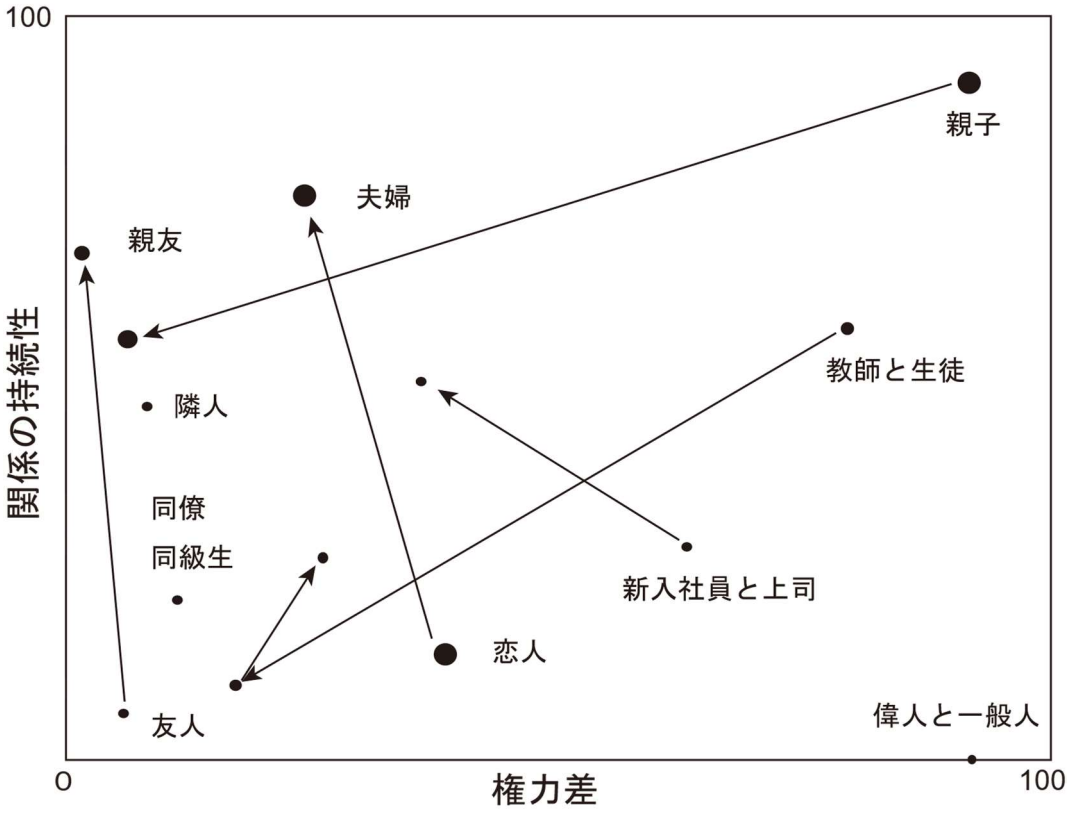
ハラスメントは権力差とその持続性によって生じる

この頃、人間社会のいたるところでハラスメントが報告されている。報告されているのは最近かもしれないが、これは人間が誕生してから、また誕生する前から、起こっていた問題である。一方で、ハラスメントが生じる人間関係についての考察は乏しい。私は「生物的に権力を考察する」なる論考をこのホームページで公表したが、その延長として人間社会の権力とハラスメントについて、総括的に考えてみたい。

この考察では、関係する個人の「権力差」と権力が持続する長さ、すなわち「持続性」に着目する。「生物的に権力を考察する」では、権力について幅広く定義したが、ここでは人間の体力、財力、地位の高さを権力とし、外見やしぐさによる魅力は含めない。例えば、ペットや赤ちゃんは可愛らしさによって飼い主や親を魅了するが、これは権力とはしないこととする。持続性は親子や夫婦関係でもっとも強いが、それ以外に、学校や職場でも、現在の立場に執着するほど強くなる。とくに若者は夢をもってある道に進みたいと思うほど、多少のハラスメントにあっても我慢しようとするので、「権力者」によるハラスメントを受けやすくなる。下図ではＸ軸に権力差、Ｙ軸に権力の持続性を示し、それぞれの丸の大きさは平均的な愛情の深さをあらわす。そして、実線は時間の経過にともなって権力関係がどのように推移するのかを私なりに考えた結果を示している。

人間とペットの関係では、両者の権力差は著しく大きく、ペットの側から飼い主を変えることは、逃亡以外考えられないが、逃亡すれば餌をえられずに飢え死にする危険が大きい。飼い主はペットを愛すると言うけれども、ペットは完全に飼い主の権力下にある。「私はペットを家族のように愛している」とか「ペットは心の友だ」といった反論が聞こえてきそうだが、強い権力関係にあることは疑いない。人間とペットの関係では、虐待行為のみが処罰の対象になる。例えば、餌をやらない、劣悪な環境下におく、散歩しながら犬の腹をけり続けるなどの事例が知られているが、それ以外にしつけと称した軽微な虐待＝ハラスメントは多いだろう。飼育下の動物がストレスを感じずに幸せに過ごすことは、「動物の福祉：アニマル・ウエルフェア」として注目されているが、日本では家畜小屋やペットの販売業者などで、動物の福祉に反する事例が多くみとめられる。

同様に権力差が大きく、その関係が固定されている人間どうしの関係に「奴隷制」がある。奴隷は主人に逆らうことは許されず、逃げることもむずかしい。奴隷制は過去の話だと言われそうだが、人身売買は現在でも行われている。さらに、各地で起こっている戦争では、捕虜への虐待が横行し、捕虜が自分の国に対する戦争に駆り出される事態も生じている。奴隷に比べれば、権力差も持続性も小さいが、かつての王様や殿様と家来の関係も、ハラスメントが起きやすい関係であった。



大雑把に言えば、人間を含めた動物は自分が長く生き、多くの子孫をつくるように遺伝的に設計されている。そうでない動物は進化的に滅んでしまったからである。この設計図によれば、動物にとって他個体を操作して自分のために尽くさせること、すなわち権力を行使することは理想的である。しかし、いかなる動物も他個体との競争の中で生きるので、権力者になれるとは限らない。人間のように社会性が発達していれば、度をすぎた利己主義は嫌われる。ハラスメントによって利益をえようとする者と、ハラスメントに苦しめられつつ、それから逃れようとする者の戦いは、いつの時代にも続くと考えられる。

権力差が大きいが両者の関係性がほとんどない場合は、偉人と一般国民の関係などで認められるが、ハラスメントはほとんど生じない。逆に権力差は小さいが、持続性の強い関係は、親友や隣人関係で認められ、やはりハラスメントは生じにくい。このことから、権力差と持続性の積がハラスメントの強さに相関すると推測される。ただし、愛情が深い関係は、ハラスメントを緩和する。

親子関係におけるハラスメント

人間関係のうち、もっとも避けることができないのは親子関係である。親子関係は子の成

長にともなって変わっていくが、生まれたばかりの赤ちゃんと親の関係では、権力差が大きい。その差はしだいに小さくなるが、親子関係はどちらかが死ぬまで継続する。したがって、権力差が大きく持続性も高いことから、親が子に与えるハラスメントは潜在的に強いと考えられる。実際、この原稿を書いている 2023 年には、親による虐待が数多く報告されている。

動物では、親による子の遺棄や子殺しが広く知られている。その行為によって親の適応度、すなわち自らが長生きして多くの子孫を残すことが有利になれば、現在抱えている子を殺したり食ったりすることは合理的だと考えられている。もちろん、ほとんどの場合、子は親の庇護のもとにあり、愛されて育つことは言うまでもない。

親が子に暴力をふるう場合は論外であるが、親が子をどのように導いていくかは、親の意思による部分が大きい。とくに子が幼いうちから、英才教育を行って、将来偉大な音楽家、科学者、スポーツ選手、囲碁や将棋のプレーヤーにしようとする場合、子はその方針に従わざるをえない。それで偉大になればよいけれども、実際には失敗した子が惨めな思いをする例は無数にある。

そこまで極端ではなくても、親が子を育てる過程では、親の職業、知識、技術などが子に伝わっていく。それらは広い意味の教育であるけれども、子が嫌がることを無理やり押し付けるのはハラスメントになる。どこまでが許されて、どこからが許されないのかはむずかしい。ただし、現在ではほとんどのケースが子育てとして容認されており、今後の議論が必要である。

親子間の権力関係は現代の少子化とも関係している、と私は考えている。かつて食料が乏しく、身分が低いと飢え死にする恐れが高かった時代には、多くの子を育てることによって家族を増やせば、その労力によって多くの食料を確保することができたであろう。農業においても、漁業や採集においても、人手は必要である。一方で、家族が多いと必要な食料も増えることになるが、子が小さいうちは食べる量は少なくて済む。それでも、食料が確保できないときには、小さな子から抹殺することになる。親の権力が強かったからである。現代でも、親が子の労働を頼りにする場合はあるだろうが、子を虐待したり殺したりすることは許されない。そうなると、かつてのように子をつくって家業の繁栄を求めるよりも、子の養育や教育にかかる経費を気にすることになり、このことが少子化の一つの原因となっている。

親子や兄弟などの家族では、血縁関係がある。この場合には、赤の他人の場合と比べて、愛情が芽生えやすい。おおざっぱに言えば、親子兄弟を助けることは、自らの遺伝子を残すことにもつながりやすい。この点を考慮すると、親子関係は密接なことからハラスメントが生じやすいものの、ふつうは愛情で結ばれているので、残酷なハラスメントは生じにくい。そのために、図において右上に向かうほど、ハラスメントが生じるポテンシャルは高くなるが、愛情が深ければハラスメントは緩和され、両者の幸福度は上がると考えられる。

親子の関係は子の成長にともなって変わっていく。親子の権力差、ここでは体力、知力、経済力などの差は、子が成長するにしたがって小さくなり、やがて子が反抗期を迎え、自立

して家を出るようになると、ほとんどなくなるかもしれない。したがって、親子の権力関係は図では、右上から左方に移行する。親の老後に、親子の権力関係がどうなるかは、ケースバイケースだろう。

兄弟や姉妹では、親子と同様に当初は権力差が大きく、同じ家で育つのであるから、関係も固定されているが、子の成長にともなって権力差も持続性も小さくなっていく。多くの動物で報告されているように、子が小さいうちは親の世話をめぐって兄弟姉妹は競争関係にあり、わずかでも先に生まれた兄や姉の力は大きい。しかし、兄弟姉妹の関係もしだいに同等になっていくので、図における変化は親子関係と類似して、右上から左下に変わっていく。

血縁関係にない主人と奴隷、教祖と信者、師匠と弟子などの関係では、上下関係は固定され、逆らうことは許されないので、ハラスメントは継続しやすいと言えるだろう。このような従属的な関係でも、愛情が人間関係を和らげることはあるだろうが、うまくいくかどうかは両者の行動や個性によると思われる。

教師や上司によるハラスメント

次に取り上げたいのは、教師と生徒の関係である。この関係は当初は保育園や幼稚園で始まるが、そこでの虐待は近年注目されることが多い。親子と同様に、子供が小さいうちは教師との権力差は大きいが、子供が成長して小学生から中学生、高校生になっていくと、教師との権力差は小さくなり、生徒がストレスなく学校を選ぶこともできるようになる。そして大学生になると、生徒の自由度は最大となり、特定の教師とのつながりも弱くなる。ここまでの経緯は、親子関係と同じように、図の右上から左下に移動することになる。

大学や学部にもよるだろうが、大学生は専門課程に進むと、研究室との結びつきが強くなり、その絆によって就職や大学院への進学がスムーズにいく一方で、教官によるハラスメントを受けやすくなる。卒業や進学において便宜がはかられるか否かは、どれだけ教官に気に入られるかに依存することがある。言うことをきかないと就職の世話をしない、卒業させない、大学院に進めないなどの脅しは暗黙のうちに行われることもあり、アカデミック・ハラスメントとして問題になることがある。こうなると、生徒の成長にともなって図で左下がりに進んだラインは、再び右上に進んでいく。

次に学生は就職することになるのだが、卒業したての若者はまだ地位が低く、ハラスメントに遭いやすい。組織には先輩、係長、課長、部長、専務、社長などさまざまな上司がおり、地位の差が大きいと権力差が大きいことになる一方、関係の強さや持続性は弱くなる。したがって、どの関係でもっともハラスメントが起きやすいかは予測できない。しかし、新入社員はもはや子供ではなく、どの組織に就職しても辞めるのは自由であるから、その出発地点は図１では右下あたりになるだろう。そして、その組織に長く勤めることによって、その地位は多くの場合、上昇し、上司との権力差もなくなっていく。また、組織との結びつきは、勤務年数が長いほど強くなっていくので、図に占める位置は、多くの場合、しだいに左上が

りに変わっていく。
　自営業に進めば上司によるハラスメントは受けなくてすむが、一人で営業するとなると、取引先や顧客にすべて自分で対応することになり、別のハラスメントを受けることになるかもしれない。

友人、知人間のハラスメント

　友人や知人の関係では、親子や夫婦と比べて、毎日顔を合わすわけではなく、嫌な場合には会うことを止めたり、関係を断ったりすることが容易な点で、ハラスメントは生じにくいと考えられる。それにもかかわらず、友人や知人の間でハラスメントが生じるのは、恋愛関係を除けば、親子のような愛情がないからである。利害の対立が生じたり、己の利益に障害となったりすると、友人が敵になることも稀ではない。血縁関係がないために、相手を困らせたり傷つけたりしても、法律に反しないかぎり、非難されることも少ない。
　友人や知人の間でも、関係の持続性と権力差は重要である。たとえば、同じ地域に住む隣人同士の関係は持続性が強いので、何かの原因でトラブルが生じると、長い間、恨みを買うことになる。職場の同僚は、やはり毎日顔を合わせ、仕事を共有する中で、ハラスメントが生まれるかもしれない。学校の同級生や同じクラブの部員間でも、関係が続くためにハラスメントが起きるかもしれない。
　権力差が大きい場合にも、ハラスメントは生まれやすい。たとえば体力に違いがあるために暴力が振るわれるような場合には、いじめが生じて、いじめられる側はストレスを感じる。大人になって経済格差が生じて、借金するようなことになると、借りている方は頭が上がらなくなってしまう。
　同級生や同僚の関係では、多数が一人をいじめたり、噂を流して排除しようとしたりする集団ハラスメントが生じやすい。このようなハラスメントは、親子や夫婦では起こらない。また集団によるハラスメントは、被害者が訴えても、周囲がすべて加害者であると黙殺されてしまうかもしれない。学校でのいじめが、教師や教育委員会によってもみ消されるのは、その典型例である。
　最近、上級生による下級生へのハラスメントが問題になることが多い。上級生が下級生に絶対的な権力を行使することは、現代ではほとんどないと思っていたが、一部の学校や組織では、いまだに続いているらしい。この場合、同級生間に比べて、上級生が強い権力をもつことによって、権力差が増大していると考えられる。そして、そういう旧いしきたりが温存されているのは、その学校や組織、そしてその理事長や社長の責任である。
　もちろん、言うまでもないことだが、友人や知人との会話や行動はそれ自体楽しみであり、まったく他人とかかわらずに生きることはむずかしい。他の人間関係に比べれば、気楽に付き合えるのが友人・知人であり、そのことを理解して相手を選ぶことが必要であろう。
　異性が恋愛関係から婚姻関係に発展すると、さらに関係が固定され持続するので、ハラス

メントが生じやすくなる。かつては家長としての夫が圧倒的に強い権力をもっていたが、現代の夫婦関係において、夫と妻のどちらが権力をもつのかは、決まっていない。異性間のハラスメントには、パワハラに加えてセクハラも含まれるが、セクハラについては持続的な関係の中で生じることもあれば、初めて接触する相手に対して行われることもあり、権力差や持続性だけでは説明できないことが多い。

弱者の逆襲

ハラスメントを与える側と受ける側の権力差が小さくなった場合には、それまでの弱者が反撃し、権力が逆転することもある。子や生徒が成長し、親や教師との体力差がなくなると、子や生徒によるハラスメントが生じることもあるだろう。子が成長して親に虐待を加える話はよく耳にする。生徒の場合、一人では教師に立ち向かえなくても、何人かで対抗することはできるかもしれない。もともと権力差が小さい友人や同僚、夫婦の間では、いつどのようなきっかけで弱者が逆襲して、ハラスメントを解消しようとしても、不思議ではない。

ハラスメントは権力差とその持続性によってきまると述べてきたが、実際には関係する二人の間の愛情は重要である。親子や恋人の愛情は深いので、ふつうは権力差があっても良好な関係が保たれる。ただし、親子でも愛情がなくなれば虐待が生じてしまう。愛情の深さは、二人の関係や性格によってまちまちであり、時間の経過によっても変わるので、一般化することはむずかしい。

ハラスメントに苦しむ人にとって、現在、それを訴える仕組みが増えていることは望ましい。しかし、現在克服できないとしても、親子関係や上司との関係においては、年月が経って自らが成長することによって、権力差が小さくなり、ハラスメントを克服できるのだと認識することは重要であり、希望となる。

ハラスメントの意味

ハラスメントは受ける側にとっては迷惑なだけであるが、行う側にとっては意味があることが多い。親子の間では、親が望む方向に子を導く意味があり、それによって子が成功すれば、親は利益をえることができるかもしれない。教師は生徒を厳しく指導することによってクラスの秩序を守ろうとし、大学から大学院においては、自分の業績に役立てようとする。上司は部下の働きによって部署の成績を上げることができれば、自分の評価につながるだろう。友人・知人間でも、同級生に何かを買いにいかせたり、金銭を要求したりするなど、利益を求めることは多い。

他人に何かをしてもらうことは人間社会では普通の行為であるが、正常な関係では互いに協力しあうものであり、いわゆる give and take の関係になる。一方、ハラスメントでは方向性がきまっており、権力のある側が一方的に利益をえる一方で、権力のない方は苦痛を

覚えるだけである。ただし、仕事や研究でどこまでがハラスメントにあたるのかの線引きはむずかしい。我慢をしていれば報酬や地位の向上が見込まれる場合には、ハラスメントを覚えるような命令でも受け入れることはあるだろう。

利益に関係なく、ハラスメントを行う人間もいる。ただ威張りたい、怒鳴りたい、被害者が苦しむのを見たい、というような人間は、その行為によって喜びを感じているのだろう。実際、他人への攻撃によって自分の優位性を確認することは、脳内に快楽ホルモンを分泌することになり、健康にもよい影響を与えることが知られている。逆にハラスメントを受ける側は、ストレスホルモンを分泌し、健康も害することになる。近頃は SNS を通して、ニュースや人の意見に攻撃的な意見を乱発して憂さ晴らしをする人が多い。車の運転中に、周りの悪口を言いまくる人もいる。いわゆる井戸端会議の話題は他人のうわさ話と悪口である。人間にはそういう側面があることを知ったうえで、よい人間関係を築きたいものである。

ハラスメントを起こす性格

すべての動物において共通する性格として、攻撃的か平和的かという軸と、大胆か臆病かという軸、そして積極的か消極的かという軸がある。攻撃性は同種の仲間との闘争において必要であり、大胆さは危険な場所で食物をとったり新しい生息地に進出したりする能力に関係する。積極的な性格は、しばしば攻撃性や大胆さとも関係するが、社会においてリーダーシップをとるうえで有利である。

一方で、攻撃的な個体は闘争において傷つくことが多く、大胆であったり積極的であったりする個体は、捕食者に襲われて落命する危険と隣り合わせにある。かといって、あまりに臆病で消極的な個体は食物も棲み場所もえられずに、飢え死にしてしまうかもしれない。集団を構成する個体がすべて同じ性格であると、捕食者や環境が変わった場合に全滅しやすいかもしれない。

このような理由で動物にはさまざまな個性が発達するのだが、ハラスメントについていえば、攻撃的で積極的で大胆な個体によって引き起こされやすいと言えるだろう。このような性格をもつ人間は、社会の中で成功することが多く、尊敬されたり頼りにされたりすることが多いが、一方で対人関係においてトラブルを起こしやすい。親や教師、上司などを選ぶことはできないが、友人、恋人、配偶者については自分で選ぶことができるので、ハラスメントを避けることを第一に考えるのであれば、その恐れのない穏やかな相手を選ぶべきであろう。一方で、社会的に成功したり、付き合っておもしろかったり、刺激的であったりする相手を好むのも一つの生き方であるが、その場合に受けるハラスメントについては、自己責任で対処する必要がある。ハラスメントに対する社会の目は年々厳しくなっており、被害を訴える方法も増えているので、必ずしも悲観的になる必要はない。

ハラスメントの今後については、世間の目が厳しくなり、被害者の救済が進むことが期待される一方で、長期的には増える恐れがある。攻撃的で積極的な個体が戦争や病気によって

死滅する確率が減り、臆病で消極的な個体に比べて多くの子孫をつくると予想されるからである。ただし、このような予想をする前に、現代人の個性と社会上のさまざまなファクター、たとえば収入、婚姻率、子孫の数、寿命などを解析するべきだと思うが、人間の社会学あるいは人間生態学は、少なくても日本では、そのレベルに達していない。個性とハラスメントとの関係を明らかにすることは、今後の個人の生き方や社会の公正化に向けて、ますます重要になっている。